二三のものが報告されているのみである。今回やつとこの一種を追加することが出来た。本科のものには一般に高山乃至寒地の動物の死骸や排泄物等の上に生育するものが多いが，本種はトウヒ，オホシラビソ等よりなる針葉樹林内の腐朽しかかつた倒木上に群生していた。子嚢に於ける柱軸と蒴歯は特異である。即ち柱軸は永存し乾燥した子嚢では子嚢壁のみが収縮し，柱軸だけが屢々棍棒状に長く突出する。蒴歯は単立してテープ状をなし 22 図に示す如く乾燥時は展開しているが濕りを帯びると急激に内側に巻縮する。この運動は乾濕の変化に極めて敏感で，検鏡しながら呼気をかけるだけで展開，巻縮の運動を何回も繰返す事が出来る。その状あたかもスルメを焼く時の脚の動きに似て奇抜である。スギナの胞子にある彈糸の運動と同じ機構によるものと考えられる。葉は舌状をなし全縁のものと鋸歯あるものとある。

産地：南アルプス，広河原峠 (1950 m, 1953-VIII-9, No. 14462).

分布：欧，北米北部。

今回発表の日本フロラへの新追加 3 種については野口彰博士よりも確認をして戴いたのでここに感謝の意を表する。　(続く)

○カワノリ伊豆半島に産す（千原光雄）　Mitsuo CHIHARA: *Prasiola japonica* Yatabe found in Izu Peninsula.

カワノリ (*Prasiola japonica* Yatabe) の産地については，次々と報告があつて今では，かなり多くのところが知られるに至つた。カワノリの研究者である岡田喜一博士は本誌 14 巻 7 号 (1938) の報告で当時までにわかつていた産地として北は栃木県塩原 (箒川) から南は熊本県八代郡五家荘 (球磨川) に至る太平洋斜面の幾つかの河川の上流地域を挙げ，そしてそれらの産地から考察して房総，三浦，伊豆，紀伊の諸半島と中国地方及び日本海沿岸に知られていないことは分布上興味ある点と述べておられる。然るにその後，小清水卓二博士は紀伊半島大台ヶ原本沢川に産することを報告された (本誌，**27**: 72, 1952)。

ところで伊豆半島に於ては少くとも藻類学者の間ではその産否が全く未知であつた。私は 1952 年秋，伊豆半島天城山麓の河津川流域の藻類採集を試みた際，カワノリが多数生育しているのを見ることができた。この川は天城山系に端を発し南伊豆の海に注ぐもので，生えているところはその上流，七滝附近である。その後，訪れたときもやはり見ることができた。そこでこれを持ち帰り培養したり顕微鏡で観察したりして検討した結果，全く *Prasiola japonica* Yatabe に当ててよいことがわかつた。このものは，その土地では早くから食用として利用されていたとのことであるから，ある人達の間では既に知られていたことであるかもしれない。しかし上述のようなカワノリ産地発見の過程から考えてここに報知した次第である。　(東京教育大学下田臨海実験所)